

1. 活動のテーマ

<テーマ>

生物

<テーマの設定理由>

- ・ほとんどの幼児が、日ごろから園庭の樹木や木の実、昆虫や草花、飼育しているウサギやカメ、魚やイモリに大変興味をもっており、自分たちで種から育ててみたい、よく見て描きたい、好きな食べ物を調べて世話をしたい、という意欲が見られるため、「生物」をテーマに設定する。
- ・飼育栽培物を含め、自分が興味をもった身近な生物をよく見る、世話をする、成長・生長を喜ぶ、味わう、という経験を重ねる中で、生物への関心を深めたり広げたりし、身近な生物との暮らしを楽しむため。

2. 活動スケジュール

- ★身近な生物に興味をもち、育てる、食べる、見て描く、世話をする、遊びに取り入れるなど、自分から取り組めるようにする
- 4月～虫探し、虫の飼育、花びら集め、色水作り、木登り、木の葉や木の実集め、果樹の収穫などを通して、園庭の生物について知る
- 4月24日 移動動物園「どうぶつたちがやってくる」…飼育員の話聞いて、好きな食べ物や動物の扱い方を知り、餌をやったり抱いたりして触れ合う
- 6月～屋上の畑で昨年度植えたジャガイモを収穫し、ふかして食べる
- 9月～プランターにサラダ大根とベビーキャロットの種をまき、防虫ネットをかけたり、間引きをしたりしながら育てる
- 12月～サラダ大根とベビーキャロットを収穫し、生で食べたり野菜スープに入れて食べたりする
- 通年～水槽の魚を観察して絵を描いたり、ウサギが好きな草を園庭で探して食べさせたり、カメ、イモリ、カブトムシやチョウの幼虫などを観察したりして親しむ

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

<動物たちがやってくる>

★園では、ウサギと亀を飼育している。どんな生き物にも命があること、何をしたらうれしいのか、悲しいのかなどを子どもたちが知るきっかけにしてほしい。そこで、牧場に来園してもらい、牧場の職員から話を聞いて、動物と触れ合う機会を作った。

- ・1週間くらい前から、牧場から配布された「どんな動物が園にやってくるか、エサはどんなものを食べるのが書いてあるポスター」を各保育室に掲示した。
- ・動物のための餌（りんご、小松菜、ニンジン）を用意。
- 活動の内容、活動中見られた子どもの姿、教諭との関わり等
- ・「アヒルはにんじん たべないんだって！」と牧場職員から教えてもらったことを教師に教える姿があった。
- ・「なんで、ひよこはおかあさんとはなれているの？かわいそう！」など、見て思ったことを口にする人もいた。
- ・大きいヤギや羊はエサをよく食べるのであげたいが、怖いと思う園児もいるので、教師と一緒に餌をあげてみるなど、園児がやってみたいと思うことをできるように援助した。



<育てて食べる活動>

★好き嫌い、食べず嫌いのある幼児が年々増えているように感じる。また、家庭でも試行錯誤している様子を耳にする。園で友だちと一緒に一口食べてみようかなと気持ちが動いたり、自分達で収穫したものは食べてみたい！という気持ちになったりする姿がみられることから、園で野菜を栽培し、生長を楽しみながら、収穫して食べる一連の経験を通して、子ども達の興味、関心、意欲を高めていくきっかけとしたいと考えた。

自分のまいた種から芽が出て、葉が広がっていく変化を目の当たりにすることで、大きな喜びに繋がり、また、収穫の喜びは、食への感謝や大切にしている気持ちにも繋がる。それらが食への興味関心にも繋がり、食事を楽しむ気持ちも育まれていくと考える。

○準備した教材

・野菜用プランター ・培養土 ・種 ・防虫ネット ・液肥

○子どもの姿、教師とのかかわり

・年少時に植えたじゃがいもを収穫する際には、「早く食べたい！」「どうやって食べようか！」とわくわくしている様子がみられた。普段、野菜を食べない子も楽しみにしている様子であった。

実際に収穫し、塩ゆでしたものを子ども達に出すと、野菜が苦手な子も自ら食べ、「おいしい！」「幼稚園のじゃがいもはおいしい！」と喜んでいた。

・自分達の手で育てて収穫したものは食べてみようかと心が動く様子であったので、9月に種をまき、サラダ大根とベビーキャロットの栽培をすることを子ども達に提案してみた。みんなとても喜び意欲的に取り組んだ。

・種をまくと、毎日様子を見て「まだだね（芽が出ないね）」と子ども同士で話したり、芽が出ると「大変！葉っぱが出てきたよ！」とクラス中の友達に知らせたりする姿があった。

・毎日、水をやり、「昨日より大きいんじゃない？」と生長を見守り、楽しんだ。

・年末に収穫してみると、思っていたよりも生長が遅く、まだまだ細く小さかった。子ども達は「あれ？写真と違う…」と戸惑い、なぜ大きくならないのかを教師と一緒に考えた。

様々な意見が出る中、「お日様が当たるようにしよう」という意見が出て、プランターを置く場所を変えることにし、冬休みに入った（冬休み中に教員が液肥を与えた）。

また、この時に収穫したサラダ大根とベビーキャロットをスライスし、塩を振って、子ども達と食べた。生野菜だったが、野菜嫌いの人も口にしたり、「もっと食べたい！」とおかわりをしたりして、よく食べた。

・年明けの3学期、プランターの野菜の葉が大きく元気に生長している様子を見て、大喜びの子ども達。野菜の生長に太陽の力が必要なことを実感できた。

・幼稚園伝統の野菜スープ作りで、各自で野菜を持ち寄るが、その中に「自分達で育てたサラダ大根とベビーキャロットを入れたい！」と子ども達から声があがり、再度収穫してみることにした。12月に収穫した時より、大きく太くなっていて、野菜の生長を実感した。

・野菜スープも、自分で持ってきた野菜が入っていたり、自分達で育てて収穫した野菜が入っているので、回を重ねるごとによく食べるようになり、野菜が苦手な人も少しずつ食べられた自信が付き、食のバリエーションが増えてきつつある。



<熱帯魚の観察>

★玄関には、色とりどりの熱帯魚が泳ぐ魅力的な水槽があり、子どもたちはよく見ているが、「絵を描きたい」「本を作りたい」と言ってくる子どもたちのために、虫眼鏡、紙、色鉛筆、段ボール紙で作った画板を用意している。

・「お魚の絵を描きたい！」と職員室に子どもたちが来ると、水槽の前に子どもたちと一緒にテーブルと椅子を用意し、紙と色鉛筆をテーブルの上に出し、一緒に熱帯魚を見るようにしている。誰かが描き始めると、「紙ください」と別の幼児が来て、二人、三人と増えていくこともある。水槽の管理を委託している担当者が用意してくれた、魚の名前が記された写真ボードを見ながら、「これは何という魚？」と名前を聞いてきたり、「見て！○○がいた！」と奥の方にいる魚を見つけて喜んだり、思い思いにおしゃべりを楽しみながら、色鉛筆で絵を描き始める。魚や水草を見て描く人もいれば、自分が描きたいものを描き始める人もいるが、水槽の前でじっくりと落ち着いた時間を過ごしている。

・一人の4歳児の男児が「魚の本を作る」と言って、紙を折ってはさみで切り始めた。ホチキスで留めて本の形にすると、1ページに1匹、魚を描いて「名前を書いて」と言ってきた。途中で片付けの声がかかると、保育室に持っていき、翌日また描きに来て、1冊の「さかなのほん」を仕上げた。その後も、「紙ください」と魚の絵を描きに来て、同じように紙を切り、ホチキスで留めて、4冊の本を完成させた。魚の形や色をじっくり見て、特徴をとらえて表現するようになった。

・その様子を、園庭への行き帰りに見ていた3歳児が、「魚の絵を描きたい」と言ってきた。それまでは見ているだけだった人が、自分から「描きたい」と言って、保育者と一緒に机とテーブルを用意し、水槽の魚を見ながら描こうとする姿が見られるなど、玄関とう場所ならではの、経験ができ、年長児から年中児、年少児へと、観察して描くという活動が受け継がれていっている。



4. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

<動物たちとの触れ合いを通して>

初めて動物に触れ合う園児も多く、生き物を身近に感じるいい機会となった。動物たちはどんなものが好きなのか、動物による違いを知ったり、「毛がふわふわしている！」など実際に動物を見たり、触れ合ったりすることで得られる気づきも多くあった。これを機会に、園で飼育しているうさぎへの関わり方に変化が見られた。自分のあげた野菜をなかなか食べてくれないときに無理やり口にもっていったのが「いまは、おなかいっぱいなのかな？」とうさぎの気持ちにも少し気づけるようになった。

<野菜作りを通して>

近年、食へのこだわりが強かったり、特定のもの以外は口にしない人がいたり、子どもも保護者も食への関心や意欲が変化してきているように感じていた。

家庭でできることもあるが、幼稚園という集団の中で、他児からの刺激も受けながら、意識が変わっていくといいなと思い、取り組んできたが、本当に自分達で育てたり、収穫したり、調理したりしたものは、苦手なものであっても自ら口に、「おいしい!」と感じ、「また食べたい!」と意欲に繋がっていった。

手をかけることで、気持ちが入り、苦手だと避けていた野菜が食べられ、それが自信となり、その人の成長へ繋がっていく様は、食への興味関心にとどまらず、その人自身の育ちに大きく影響するものだと改めて感じた。

<熱帯魚の観察を通して>

子どもたちが「見たい」「描きたい」と心が動いたときに、すぐに応えられるよう、準備をし、一緒におしゃべりをしたり、見守ったりしながら、必要な手助けができるようにすることが、「できた!」という喜びにつながり、「もっとよく見よう」「次はこうしよう」という更なる探究につながっていくことを実感した。

熱帯魚は管理が難しいが、管理を委託している担当者の店舗が園の近隣にあり、教員や子どもたちの疑問にもすぐに答えてもらえる環境が整っていることも、子どもたちの意欲を高めることにつながっている。年長児から「ウーパールーパーを見たい」という声が上がったときも、年長児全員でお店を訪問して観察させてもらうなど、普段からの地域とのつながりが、子どもたちの経験をより豊かにすることも実感している。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

<テーマ>

米

<テーマの設定理由>

- ・年長児は、本園で20年以上取り組んできた米作りを引き継ぐことに誇りと喜びをもっており、実体験を通して、米作りについての様々な技術や知識を学べるよう「米」をテーマとして設定する。
- ・米作り後の活動として、稲刈り、餅つき、注連縄づくり、獅子舞、どんど焼きといった、米作り文化にかかわる行事についても体験し、年中児への引継ぎを通して伝統文化を継承していく姿勢を育むため。

2. 活動スケジュール

昨年度の年長組から託された稲穂の籾外し、芽出しから始まり、代掻き、田植え、稲刈り、籾殻剥き、脱穀、という米作りの流れや、しめ縄作り、餅つき、鏡開きや獅子舞、どんど焼きなども経験し、年中組へと引き継いでいく。

- ・4月～6月：苗作り・代かき・田植え
- ・7月～9月：稲の観察
- ・10月～12月：稲刈り・しめ縄作り・脱穀・餅つき・鏡餅作り
- ・1月：獅子舞・鏡開き・どんど焼き
- ・3月：年中組への引き継ぎ

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

<お米の活動>

○用意したもの

- ・代掻き前の田んぼの補修と施肥（造園業者に依頼）
- ・稲苗（足りない分を筑波大学附属駒場中学校・高等学校に依頼して分けてもらう）
- ・餅つき用品一式（レンタル）

○米作りを通じた探求の深まり

・稲刈りをして干し、籾外しをする活動の中で、一粒ずつ手で取りながら「こんなにたくさん！取り切れない…」という経験をした子どもたち。担任が、割り箸を出したことで、「すごい！1回でこんなに取れる！」と稲穂を割り箸の間に挟んで引き抜く姿が見られた。園庭にゴザを敷き、他の遊びをする合間にも、数人が集まって、おしゃべりをしながら籾外しのコツをつかんで繰り返し楽しむ姿が見られた。

・桶いっぱいになった籾を、食べられるようにするためには、籾殻を剥く必要があり、一粒一粒爪で剥いたり、ペットボトルのキャップでこすって剥いたりしていた子どもたち。「楽しいけど、終わらない…」という経験をしたところで、担任が、本園の伝統のすり鉢とソフトボールを持ってくると、一度にたくさんの籾殻剥きができる様子に「すごい！」と目を輝かせていた。「見てて」「こうやるんだよ」と、すり鉢に一つかみの稲籾を入れ、ソフトボールでゴリゴリ擦って、「ふうっ」と息を吹き、籾殻だけを飛ばす様子を伝え合う姿が見られた。

・それでも、まだまだたくさんの籾が残っており、「どうしようか…」と困っていたところに、ついに、令和5年度の卒園記念品である「脱穀機」を登場させると、ボールにすくった籾があっという間に玄米と籾殻に分かれる様子を見て、「機械ってすごいね！」と大興奮の子どもたち。終わったら、「もう1回！」と列に並んで、繰り返し、脱穀の様子を見ていた。

・こうして、苦労して玄米にしたお米を研ぐ際には、一粒もこぼさないように水をかえる姿があった。一部は餅つきに使う鏡餅を作り、一部は炊いておにぎりにした。苦労して脱穀したお米が炊けると「いいにおい！」「おいしいね！」とみんなで味わった。

<獅子舞>

1月8日 始業式の後に、園ホールで獅子舞を鑑賞

獅子舞の前に、和太鼓やお囃子の演奏、いわれについての話を聞く

1月8日～ 子どもたちの「獅子舞ごっこ」が始まる

○準備したもの

- ・ホールの環境設定（年長組が作った鏡餅や羽子板を飾りお正月を祝い、獅子舞を迎える準備をする）
- ・獅子舞を見た後に「作りたい！」という声が集まるのが予想されるので、工作で使えるティッシュの空き箱やカラーポリ袋を用意しておいた。

・3学期の初日なので、年中児は「獅子舞が来る…」とわかっている人もいた。「楽しみ！」と言う人と、去年の経験から「こわい…」と怖がる人、泣く人もいた。

毎年、獅子舞をみせてくださる演者の方は「子どもにとって“こわいもの”の存在は悪くない。“神聖なもの”“畏れ多いもの”という存在は人間に必要なもの」というような話をしてくださっていて、去年経験して子どもたちの中にある漠然とした「こわいかも…」という感情は「大丈夫だよ！こわくないよ！」と否定するものではなく、寄り添うべき感情であると思い、「こわい」と感じたときのかかわりを大切にしました。

・演者の方が、冒頭で話をしてくれるので、子どもたちは「この人が中に入ってやるのか…」となんとなく理解できたり、和太鼓の迫力ある演奏をみせてくださり、親近感もわいている様子だった。

・獅子舞が始まると、怖がっていた人も真剣に見入る姿があった。獅子の耳が動く様や足さばき、獅子の動きからどんなことをしているのか想像を膨らませたり、「なんだか猫みたい」という声が聞こえたり、よく観察している様子が見られた。途中、みかんを見つけた獅子がそれを食べ、しばらくすると皮だけが出てくる場面では、驚きと「どうやって食べたの?」「獅子が食べた?」「すごい!!」と様々な声が聞かれた。

・保育室に戻ると早速「獅子舞やりたい!」という声があがり、作るようになった。空き箱の中からティッシュの箱を探し出し、「どんなだっけ?」「耳がついてたよ」「髪の毛もあるよ」「中に入るやつはどうしようか?」と友達と話しながら思い出し、イメージを膨らませて形にしていこうと楽しんだ。「歯があった!」「みかんを食べるから穴を開けたい」「被る布には模様があった!」と細かいところまでよく見ていて、友だちの気づきに「ああ!そうだったね!!」と自分の作品に取り入れる姿も見られた。

・登園時から泣いていた子どもは、獅子舞が始まっても担任にしがみついていたが、保育室に戻ると、みんなと一緒に獅子頭を作り、獅子舞になりきって楽しむ姿があった。

・獅子頭が完成すると、早速他のクラスに声をかけ、「獅子舞ショー」が始まった。

「音楽を流して!」という声があがり、お囃子の曲を流しながら、舞をみせたり、みかんを食べる場面を再現したり、お客さんの頭を囓んで「いいことがありますように」とささやいたり…楽しむ姿があった。



<振り返りによって得た保育者の気づき>

<お米の活動を通して>

お金を出せば何でも買える便利な時代だからこそ、自分たちの手育て、自分の手で脱穀したお米を食べるという実体験が、何にも代えがたい学びになることを再確認した。

子どもたちは、初めての体験の中で感じたこと、驚いたことや深く実感したことを言葉や体で素直に表現していた。そして、その驚きや気づきを共有できる仲間がいることで、伝え合い、学び合う経験になっていった。

どのタイミングで、どのような物や道具を提示するか、保育者が見通しをもちつつ、子どもたちと一緒に驚き、共感する姿勢が豊かな学び合いにつながることを改めて実感している。



<獅子舞の経験を通して>

本物の獅子舞、お囃子を目の前でじっくり鑑賞できたことは、子どもたちにとって強く印象に残る体験で、すぐに「やってみたい!」と遊びへ繋がっていく姿が見られた。「見て、体験して、終わり」ではなく、体験したことを遊びに取り入れて、更に深く楽しむことで、様々な気づきや学びに繋がっていると感じた。獅子頭を作る際には、「どうやって口を開けていたんだろう…」と誰かが呟くと、工作の得意な他児が「こうやったらどうかな?」とアイデアを出し、それを取り入れて作る様子もあった。友達の意見を取り入れる様子からは、互いのいいところを認め合っている関係性が育まれていることが感じられた。

また、「獅子舞って、こわいの?」「神様なんだよ!」「食べられちゃう?」「食べないよ!優しく囃むんだよ」と、獅子舞についてそれぞれが思うことを話して興味や関心を深めていく姿もあり、幼児期に実体験をすることの大切さを改めて感じた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

<テーマ>

絵本・音楽

<テーマの設定理由>

- ・日ごろから絵本や本園オリジナルソングに親しんでおり、移動図書館や音楽物語の読み聞かせ、人形劇や演奏会などの文化財にも興味や関心を持ち、経験したことを自分たちの遊びに取り入れようとする姿が見られることから「絵本・音楽」をテーマとして設定する。
- ・より豊かな環境の中で感性を磨き、自らも表現しようとする意欲が芽生えるようにするとともに、一人一人が、友達と一緒に表現する喜びを味わえるようにしながら、表現の仕方についての探求を深めるため。

2. 活動スケジュール

通年：移動図書館での絵本貸し出しや絵本読み、ショーごっこ、劇遊びなど
7月～：音楽会打合せ・年長組による70周年記念ソング歌詞作り開始
12月4日：音楽会
11月5日：人形劇観劇会
2月13日：お楽しみ会
3月5日：おはなし会

3. 探究活動の実践

<年少組 ごっこ遊び>

★園児が絵本を個別に楽しむだけでなく、クラスや学年で共に楽しんだ絵本を題材に、劇あそびや音楽物語に展開する機会を設けている。・何かになりきることが好きな人だけでなく、友達や教師と一緒にごっこ遊びの楽しさを感じてほしい。

・学期に2回程度、担任がクラスの子どもたちの興味関心に合わせた絵本や紙芝居、図鑑を選書し、各保育室の本棚に置き、いつでも好きなときに見られるようにしている。

・毎日、2回、集まり時に担任が絵本や紙芝居を読む。

・「移動図書館」

5/29、6/26、7/3、9/18、10/2、11/20、12/11、1/29、2/19、2/26、3/5

絵本の専門講師やボランティアの保護者による絵本の読み聞かせ、絵本の専門講師が選書したものを、園児が自分で1冊選んだ絵本を自宅に持ち帰り、保護者と一緒に絵本の時間を楽しめるようにしている。

・12月から2月末まで毎日、遊びの中で『3びきのこぶた』ごっこを楽しんでいる。

・2/13 おたのしみ会（劇あそび発表会）で、オリジナルの『3びきのこぶた』をクラス全員で楽しんだ。

・子どもたちの興味のありそうな絵本・紙芝居・図鑑などを定期的に見直す、選書する。

・子どもたちからでてきたつぶやきをひろい、「やってみたい！」ことを実現できるように、お面バンド、画用紙、カラーポリ袋、段ボール、布など、すぐに出せるようにした。

・おおかみをこらしめる作戦や武器、監視カメラなどの子どもたちのイメージをそのまま大事にしながら、やりとりを楽しめるように関わった。毎日、毎日、「きょうもやる！」という子どもたちの声は何よりも楽しんでいる証拠だった。一連の活動を通して、教師や友達との関わりが深まり、みんなと一緒に活動する楽しさを味わった。

<活動の内容>

<年少組 音楽に親しむ活動>

- ・1学期、年中組や年長組のショーごっこのお客さんとして招かれ、ショーごっこを見た。
- ・2学期、自分たちでもやってみたくなる。カラーポリ袋やリボンを使ったドレス、衣装などを教師と一緒に作る。また、年中組が使っていた簡易舞台やお客さん用の椅子を並べたい、と言い、同じものを一緒に準備する。
- ・ショーごっこがしたくなったら、いつでもできるようにした。
- ・10/23 運動会で音楽に合わせてダンスを楽しんだ。
- ・音楽会の1週間ほど前から、楽器の掲示や音楽物語の『ぐりとぐら』の掲示を貼り、子どもたちの興味関心を高める。
- ・12/4 音楽会
- ・12/5～ 音楽会ごっこが始まる。保育室で楽器を思い思い楽しむ。
- ・年中長組の音楽会ごっこにも招待される。中には、楽器を触らせてもらい、一緒にいろいろな楽器の音を楽しむ幼児もいた。

* * * * *

- ・園で学年に1つタブレットを購入。音楽のサブスクリプションを契約して、いつでも子どもたちのリクエストの曲を流せるようにした。
- ・カラーポリ袋、リボンなどを使い、お面ベルト、画用紙など子どもたちのイメージに合う衣装作りをし、音楽を流すことで、なりたいものになりきって踊る楽しさを存分に感じ、「みてみて！」と自分の表現を教師や友だちに見て欲しい気持ちを伝える姿につながった。

* * * * *

- ・今年度も、プロの演奏家を招き、創立70周年を記念して作曲してもらった歌を聞いたり、絵本に音楽をつけてもらい、園児が歌うパートを入れ込んだりして、本物の音や絵本の物語を子どもたちが楽しめるようにした。プロの音楽家の演奏を間近で聴くことで、楽器や演奏することへの興味関心を深め、その後の音楽会遊びなどに展開していくことが予想されたので、ペットボトルにドングリを入れたマラカス、太鼓、すず、カスタネットを用意し、いつでも子どもたちが鳴らせるように保育室の一角に配置した。
- ・登園すると、「こういうの、やりたい」と、広告紙を細く丸めた棒を指揮棒に見立て、音楽会で見た指揮者の真似を始めた。タブレットで子どもたちが親しんでいる曲を流すと、その音に合わせて思い思いに好きな楽器を鳴らしたり、踊ったりしながら、体全体で表現する姿が見られた。
- ・2階の年中・年長組では、様々な楽器を使った音楽会ごっこが開催され、そのことを聞きつけた年少児も、お客さんになったり、楽器を持って仲間に入れてもらったりするなど、自分から音楽会後の活動楽しむ姿が園内のあちらこちらで見られた。



<年中組 移動図書館>

- ・移動図書館のある日は、「今日は本を借りられる日？」と心待ちにしている姿がある。
- ・毎回同じ本を借りて嬉しそうに持ち帰る子どもがおり、「またこの本を借りてきた！」と、とても満足そうな様子である。「本当にこの本は面白いんだ！」と笑顔で話す様子から、家庭に持ち帰っても、毎回楽しく読み聞かせしてもらっている様子が目に浮かび、教師と保護者との会話のきっかけにもなった。
- ・本を借りられる日は1時間程度、専任講師と保護者のボランティアが本を選ぶお手伝いをしてくれたり、貸し出し作業をしてくれたりしている。その中で、「この本にしようかな…どうしようかな…」と迷っている子どもには「少し読んでみる？」と読み聞かせしてもらっている。自分で見たり読んだりする本もよいが、読み聞かせしてもらえる時間、経験もとても素晴らしい時間である。また、貸し出し受付では、「クラスとお名前を教えてください」「〇〇〇〇です」「□□□の本を借りるんですね？」「はい」…というやりとりをして借りる過程も楽しんでおり、自分の母親以外の人と関わりをもつことにもつながっている。



4. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

<ごっこ遊びの活動を通して>

- ・1つの絵本『3びきのこぶた』を通して、保育室では、段ボールや布を使ってレンガのおうちに見立てること、園庭でもテーブルや椅子で家を作ったり、砂の型抜きでごちそうを作ったり、カラーコーンや塩ビ管などを大砲や監視カメラに見立てて遊んだり、子どもたちのイメージは本当に豊かだなと感じた。
- ・絵本の物語にこだわらず、教師が子どもたちのいろいろなアイデアを受け入れ、やり取りを楽しめるようにすると、子どもたちから「これはどう？」「つぎは、こうしてみよう！」など次々に遊びへの意欲が湧いていた。その意欲が毎日続いていた。また、遊びに必要なものを作りたくなり、ハサミやセロテープ、新聞紙、画用紙などを使う姿がでてきた。
- ・1つの絵本を通して、クラスのみならず、園庭や保育室のあちこちで、友達や教師と一緒に楽しむことができるごっこ遊びになった。また、ねこや警察官なども登場するオリジナルのストーリーができあがり、みんなで取り組む中でも、一人一人が自分のやりたいことをのびのびと表現することができた。

<音楽に親しむ活動を通して>

- ・音楽がかかることで、楽しそうな雰囲気が伝わり、周りで遊んでいる子どもたちもやってみたい気持ちになる人が多かった。
- ・自分のなりたいものになりきることで、自分の表現を教師や友だちに見てもらおうことで喜びを感じていた。
- ・このショーごっこを通して、友達とつながるきっかけになった人がいた。
- ・サブスクリプションを契約していること、タブレットがあることで、子どもたちからのリクエスト曲をかけてあげられるよさを感じた。
- ・音楽会では、やはり、本物に出会うことはとても貴重なことで、子どもたちが「やってみたい!」「あんなふうになりたい!」と素直に思い、自分たちの遊びに自然と取り入れようする姿があった。だからこそ、毎年この行事を大事に考え、音楽家の方々と一緒に時間をかけて企画し、取り組んでいる。
- ・年少では安全面から常時まだ出せない楽器が年中長組にはあり、それを触らせてもらうことで特別感を味わっていた。異年齢交流が日常にあることがとてもいい影響になっている。
- ・行事で得た体験を次の日に遊びの中で真似して楽しむことができるような環境を教師が準備しておくことが大切だと子どもたちの遊んでいる姿を見て改めて感じた。

<移動図書館の活動を通して>

・本園では、本を多数所蔵しており、長年、絵本の貸し出しを行ってきた。保育室にも本を常に多く置き、環境を整え、担任が季節ごとに入れ替えをしながら絵本や図鑑など、その時の子どもたちの興味・関心に合わせて本を選んでいる。日々の読み聞かせはとても大切な時間で、通常、昼と降園前とクラスごとに2回行っている。担任が選書するよさは、今の子どもたちの興味関心を身近で感じ、それに合う本を選択できることや、子どもたちの好みをよく理解して好みそうな本を選べるなどが考えられるが、一方で、担任が選書することで、好みに偏りが出る可能性もあると思われる。

・普段は保育に入っていない専任の講師に選書を依頼したことで、子どもたちが自由に絵本を手に取り、選んで、家に持ち帰り楽しむ経験になり、本との出会いの可能性を更に広げてくれる経験につながった。本を借りて家庭に持ち帰ることで、親子の会話が生まれ、読み聞かせを通して親子の時間がもてる機会にもなっている。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

<テーマ>

感覚

<テーマの設定理由>

- ・本園ではモンテッソーリの教材教具を貴重な文化財ととらえ、遊びのコーナーのひとつとして設置しており、興味関心をもった幼児が自分から取り組み、試行錯誤しながら楽しむ姿が見られることから、「感覚」をテーマとして設定する。
- ・モンテッソーリ教師の働きかけにより、感覚を研ぎ澄ませ、文字や数量、色や形についての新たな気付きを得るため。

2. 活動スケジュール

★遊びのコーナーに用意した教材教具の中から興味をもったものを自分で選び、文字や数量、色や形についての感覚を養う。

★実績（人数）

5月12日（年長13）・19日（年長6）・26日（年長11）／
6月2日（年長11）・9日（年長8）・16日（年長6）・23日（年長11）
30日（年長7）／7月7日（年長11）・14日（年長7）／9月8日（年中14）・22日（年中4・年長4）・29日（年中3・年長10）／10月6日（年中8・年長14）・20日（年中1・年長2）・27日（年中7・年長11）／
11月10日（年中5）・17日（年中4人）／12月1日（年中1人）・8日（年中3・年長13）・15日（年中4・年長13）／1月19日（年中4人・年長3）・26日（年中3・年長10）／
2月9日（年中3）・16日（年中7・年長11）／3月2日（年中5）・9日（年中5・年長15）

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

<ひみつ袋の活動（感覚）>

・ねらい：触感覚により、立体認識力を育成すること。実物の素材や形による手触りの違いを認識すること。

・用意したもの：難易度が異なる3種類の「ひみつ袋」

（対になっている袋の中には、それぞれに素材や形の違う身の回りで親しんでいるものが入っていて、1つずつ触感覚のみで出していく。子どもと教師で順番に同じものを触感覚のみで探して並べていく。）

・「ひみつ袋」の活動を行っていたA児とB児の探求の様子：

経験したことのある活動は子ども同士で教えあう姿もあり、伝える側も教えてもらう側にも互いにとってよい経験となっている。

最初は松ぼっくり、スプーン、ボタン、洗濯バサミ、ピンポン球の入っている「ひみつ袋」の活動を選んだ。1つずつ、触感覚のみで探し、袋から出し合い、同じものを出して並べて嬉しそうな姿があった。次に同じ素材でできた形や大きさの違う積み木が12種類入っている「ひみつ袋」では、最初は苦戦しながらも少しの大きさの違いを触感覚のみで認識して出し合っていた。教師の提案で、最初に入れておく積み木の数を5つから始めることにし、徐々に増やしていった。

最終的に12種類の積み木を入れ、同じ形で少しの大きさの違いのある積み木に、互いに苦戦しながらも、全て出し終えるとほっとして嬉しそうにしていた。

最後に、袋の中の大きさの違う球を大きい順に触感覚で選び、並べた。順番に行うことで互いに刺激になっている様子だった。

友達と活動する楽しさと同時に、一人で集中したい時は一人でも活動できるよう支えていく。

<青い立体の活動（感覚）>

ねらい：触感覚により基本的幾何立体の特徴、性質に気付き立体認識力を育成する。

用意したもの：青い立体（青で統一された幾何の基本立体が10個あり、籠の中に入っている。上に柔らかい布が掛けられ立体が見えないようになっている。）

籠の中の立体を全て出し、教師側に避けておく。

最初は3つ程度の認識し易い立体を選び活動を行う。籠の中に球・立方体・三角錐を入れて布を被せる。教師は籠の中を見ずに手を入れて1つ取り出してその立体の特徴がわかるように両手で持つ。子どもに手渡し、よく触ってもらい1つずつ並べていく。

全ての立体を並べたらよく観察し、籠の中に戻し、1つ取り出してよく触ってもらう。

出したものを籠の中に戻して、触感覚のみで探してもらう。

「青い立体」の活動を行っていたC児の探求の様子：

1つずつ立体の特徴を捉えて、籠から触感覚のみで立体を認識し、取り出すことができた。1つずつの幾何学立体の名称を紹介していたところ、立方体、聞いたことがある！と嬉しそうにしていた。触感覚を通して具体物と名称を一致させていく面白みを感じている様子だった。子どもが面白みを感じている時に、タイムリーに名称を伝えることの大切さを感じた。

<1.10.100.1000のビーズ（数）>

ねらい：数字を目で見て、手で感じ取り、量を実感する。

用意したもの：1.10.100.1000のビーズ

「1.10.100.1000のビーズ」の活動に取り組んだC児の探求の様子：

C児にビーズの紹介をしたら、1000のビーズを両手に持ち「重たい！」と重さを実感している様子だった。

ビーズで量を体験した後、1.10.100.1000のカードを紹介し、ビーズ（量）に対する数を一致させた。順に、ランダムに並べたビーズに対してそれぞれに、対の数字を一致させていった。

次に、数字に対して、ビーズを合わせていった。順に、ランダムにと順に行い、ビーズを合わせることもできた。

100の鎖を紹介し、1つずつ一緒に数えた。100までテンポよく数え終わるとにこっと嬉しそうだった。

大きな数は子どもたちにとって大変魅力的なのだと感じた。次回は1000の数にも興味をもてるように促してみたい。



<鉄製はめ込み（言語）>

ねらい：書くための準備・筆記用具の持ち方扱い方に慣れる・書くときの姿勢を身につける・書くときの力の配分や右手、左手の動きに慣れる・視覚と手の動きの協応動作を身につける・直線、曲線、折れ線を書く経験をする・図形を見分ける経験を通して、記号としての文字を見分ける準備 という直接的な目的がある。

用意したもの：鉄製はめ込みのセット

「鉄製はめ込み」の活動に取り組んだD児の探求の様子：

鉄製はめ込みの色と形は子どもたちの興味をひき、好きな色で形を描くことに面白みを感じている様子。

「鉄製はめ込み」の活動が大好きなD児は、長方形を選び、描いた。少しなぞりづらい箇所も、手を置き換えて描いていった。そして、縦長の長方形を「どこでもドア」に見立てて、ドアノブも付け加え、色を塗り、ドラえもんが出てくる様子を想像した。その報告を教師にする際、とても嬉しそうだった。基本的なやり方は見てもらい、基本ができていたらその先は子どもたちの世界観を尊重していきたい。

4. 振り返り

<振り返りによって得た保育者の気づき>

- ・一人一人が主体的に取り組めるようにするためには、「一緒にやってみる？」「お友達と二人でやってみる？」と声を掛け、友達と活動する楽しさを味わえるようにすると同時に、一人で集中したい時は一人でも活動できるよう支えていく援助が大切であると感じた。
- ・「最初は先生がやってみるね。見ててね」と扱い方を見せるが、基本を押さえた上で、その先は、その人らしさを発揮できるように見守ることで、想像力を発揮していろいろな楽しみ方ができることを実感した。
- ・1つの活動が終わってから、「違うのもやってみる？」と確認し、難易度をかえて集中力が続くまで行えるように見守ることが、自分から探求していくことにつながったと感じている。
- ・保育室や園庭で自分のやりたい遊びに取り組むのと同じように、週に1回、静かな「モンテのへや」を選ぶことができる環境があることで、子どもたちの選択肢を増やし、興味や関心を広げ、自分から手に取った教具の魅力が子どもたちの感覚を研ぎ澄ますことにつながったと実感した。その過程で、一人一人の探求が深まるように、提示の仕方や声のかけ方を工夫していきたい。